

専念寺通信

一月号 (NO. 137)

<http://sennenji.s296.xrea.com/>



明けましておめでとうございます。みなさま、お変わりなく、新しい年をむかえられましたでしょうか。『通信』も12年めに入りました。本年もどうぞよろしくおねがいたします。

一枚起請文

年の初めに法然上人の言葉、「一枚起請文」を紹介させていただきます。273文字からなる、上人最後の言葉です。

もろこしわが朝に、もろもろの智者たちの沙汰し申さるる観念の念にもあらず、また学問をして念のこころをさとりて申す念仏にもあらず、ただ往生極楽のためには南無阿弥陀仏と申して、うたがひなく、往生するぞとおもひとりて、申すほかには別の仔細候はず。ただし三心四修と申すことの候は、みな決定して、南無阿弥陀仏にて往生するぞとおもふうちにこもり候なり。このほかにおくふかき事を存ぜば、二尊のあはれみにはずれ、本願にもれ候べし。念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらにおなじうして、智者のふるまひをせずして、ただ一向に念仏すべし。

もろこしとは中国のことです。わが朝はわたしたちの国、日本のことです。それぞれの国におおぜいの智者がいて仏教研究をしていました。その研究者の言うような、「観念」のための念仏ではなく「学問」のための念仏でもなく、ただ普通の人々が、(当時、文字の読めない人はおおぜいいました。)文字が読めなくとも、南無阿弥陀仏となえる、それだけで

往生できるのだとの教えです。

この教えの基本は、世界が富める国と貧しい国に分かれている今、豊かな教育を受けられる人たちの国と、学校などのない国とに徐々に世界が二分されてきている今の時代にも充分あてはまります。近

くに学校があり、教会や寺院があり、寄付もでき、自分の信ずる宗教について本を読んだり優れた人に接する機会を多く持てる人たち。一方で、生まれたときから、自分の国が戦乱にあり、飢餓にあり、文字を覚える機会も、宗教というものに接する機会も持てぬまま、生き延びることが最優先事項だ、という人たち。このような現代にこそ、「祈りのひとこと」によって、自分のいまのこの生は必ず救われるのだ、という法然上人の教えは力強い意味を持ちます。私たちの国は、いまお話ししたうちの「富める国」かもしれませんが、国の発展とともに、裕福であることと、幸福であることは、一致しないのではないかという大きな疑問がわいてきています。この今だからこそ、祈る、ということの意味、学問や観念でなく、こころで祈る、ということのちからをもう一度、思い出してみよう。

写真は、元旦の本堂、そして、全部で11粒しか落ちなかった銀杏です。毎年、写真の袋を100個か120個くらい作って、秋の終わりから新年にかけてお渡ししてきました。記念にひとつだけ作りました。私たちの国が穏やかで良いほうへ向かいますようにと祈念しつつ。

平成24年1月1日 大黒

